



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 21 主日 B 年 (2024 年 8 月 25 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ヨシュア記 24 章 1－2a、15－17、18b 節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 5 章 21－32 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 6 章 60－63 節

仕える

5 週間にわたる『ヨハネによる福音書』6 章からの朗読は、今週で最後になります。少し言葉に注目してみましょう。

60 節に「^{じつ}実にひどい話だ」とあります。フランシスコ会訳ですと「これはとんでもない話だ」となっています。ギリシア語の原文は「スクレーロス」ですが、この単語には「^{みみざわ}耳障り」、「^{ふかい}不快な」、「^た耐えがたい」の意味があります。ヘブライ語で書かれた旧約聖書をギリシア語に訳した時に、人のこころの「^{あらわ}かたくなさ」を表す場合、この「スクレーロス」を^{もち}用いたそうです。岩波書店の訳では「このことばは歯が立たない」としています。^{りかいふのう}理解不能という意味で理解したらよいでしょう。

66 節にある「^{はな}^さ離れ去る」に注目してください。ギリシア語原文では「アペルコマイ」と言います。これは「^{せつとうじ}離れる」を表す接頭辞「アポ」と「^{エルコマイ}来る」を表す動詞「エルコマイ」から成り立つ合成動詞です。「^な離れて行く」がもともとの意味です。そこから「^た立ち去る」の意味も生まれました。それから「^{べつ}別の場所へ行く」という意味へと発展していきました。

もう一つ、67 節の小さな言葉「^{じふににん}十二人」は^{きようみぶか}興味深いです。原文では^{かんし}冠詞がついてますから「あの十二人」という意味となるでしょう。

イエスさまが弟子たちの中から十二人^{えら}を選び出したというお話（マタ 10 章 1－4 節、マコ 3 章 13－19 節、ルカ 6 章 12－16 節）は、『ヨハネによる福音書』にはありません。「十二人」に^ふ触れているのは、この節と、すぐ後の 70 節だけです。福音の聞き手（読み手）が十二人について^{ぜんてい}知っていることを前提にしているのかもしれませんが。

説教 仕える

今日の第一朗読では、ヨシュアは「あなたたちの先祖が仕えていた神々でも、……土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます」（24章15節）と宣言します。自分の自由な意志で何かを選ぶ。これほど高貴な振る舞いはありません。自由に選べるというのは、人間の尊厳と結びつきます。逆に、自由なく、強制されるのは、人間としての尊厳が踏みにじられ、人権が侵されます。自由な決断とは人間にとってもっとも大切なものです。

ヨシュアは「主に仕える」ことを自由に決断したのです。しかし、その決断には根拠がありません。朗読では省かれていますが、神が民にずっと関わってくださった歴史をふり返りながら、神の助けと導きを明らかにしています。これがヨシュアの決断の根拠となります。こうして、「主に仕える」ことができるようになったのです。

「仕える」というテーマは第二朗読でも明らかになります。「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」（エフェ5章21節）は、婚姻の関係になぞらえながら、主イエス・キリストとの関わり、教会との関わり、人間同士の関わりを土台に「仕える」があるのが主張されています。この、「仕える」ことの根拠は、主イエス・キリストご自身にあります。「キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように」と『エフェソの信徒への手紙』の著者は訴えかけます。主イエス・キリストが十字架上で御自分を与え尽くすことで神と人にと仕えたように、復活のキリストは今日もまた教会のために仕えるのです。こうして、教会は「しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く」ようになるのです。

福音朗読には、「仕える」という表現は登場しませんが、「離れる」という単語がそれを暗示します。つまり、イエスさまから離れず、ついて行くことをペトロが十二人を代表して言います。「主よ、わたしたちはだれのところに行きましょうか」（ヨハ6章68節）。他の弟子たちが離れ去っていったのに、十二人はイエスさまと一緒に歩みます。それはイエスさまが「永遠の命の言葉を持っておられる」（同）と彼らが気づいたからです。

「肉」としてイエスさまをとらえ、「肉」に従って生きる人は、神さまとの関わりを生きようとはしません。そういった人はイエスさまから離れざるを得ないのです。しかし、「霊」に身をゆだねて生きようとする人は、「霊」ご自身がイエスさまが「神の聖者」（69節）であることを教えてくれます。このような人は、イエスさまがどなたであるかに気づき、イエスさまと一緒に歩み始めるのです。